

台象気経
①●●○

新潟県南魚沼市に本店を構える塩沢信用組合。県内11の信用組合の中で、預金量は9番目、支店は四つ、職員は60人弱と小規模だが、地域密着型のユニークな活動を展開している。

初年度は22人が選ばれ、3月に贈呈式があった。制服代などのため入学準備金3万6千円に加え、高校1年生の間に毎月5千円、計9万6千円が支給される。決して金額は大きくないが、その意義は大きい。

昨年9月には、「魚沼の未来基金」を立ち上げた。目的は、地域の一人親家庭の高校生に、最長で3年間、返済不要の奨学金を支給すること。原資は、信用組合の組合員などからの寄付だ。管理は、「意志ある寄付で社会を変える」を使命に掲げるパブリックリソース財団が担当する。

ふるさとの未来への寄付

奨学生の選定基準には、成績要件に加え、「将来に夢や志を有する」「魚沼地域を愛する心を有する」があり、基金の趣旨を表している。奨学生には責務として、学業に精励することのほか、信用組合の地域貢献活動に参加することなどが求められる。

NHKラジオで、奨学生の一人は、「大学でスポーツ理論を学び、将来は指導者になりたい」「奨学金は、テニス部での活動に必要な道具代や大会参加費に充てている」と答えていた。

同じ寄付でも、ふるさと納税は、自治体からの返礼品を自当てにした「カタログショッピング」的な様相を呈している。それに対してこの事例は、ふるさとを愛する人による、見返りを求めない善意に支えられており、好感を覚える。

基金は目標250万円に近い金額でスタートした。その後も寄付を募っており、順調に積み上がっていると聞く。

(文)

この欄は、第一線で活躍している経済人、学者ら社外筆者が執筆しています。